



同志社人物誌 (4)

徳 富 蘆 花

平 林 一

昭和三十七年一〇月七日——
洛西清滝に蘆花碑がたてられ、その除幕式があった。秋の日のあかるい日であったが、その式に参列しての帰途、「黒い眼と茶色の目」にてでくる次のような文章をほくは思っていた。

八月十四日の朝、敬二は丹波街道を御室

の方へ歩いた。両度の協志社生活に、高尾嵐山はよく知って居たが、清滝はまだ知らなかった。然し其里の上に聳ゆると云ふ愛宕の山は、立並ぶ西山の奥に秀でて著しい目標を敬二に与へた。此目標を仰いだり、今し方出て来た京都の方を見返ったり、数冊の洋書と些の着更を入れた赤毛布包を左の小脇に抱へて

洋傘をついて、敬二はのろろと歩いた。彼は車に乗る程の銭も墓口に残していなかった。脚気のまだ治らぬ靴ばきの脚は重く、心は更に重かった。敬二はしばしば毛布包を道傍に抛り出して、ホウと長い息をついた。後を見ると、紅い塔や寺をばつと点じた東山の裾かけて大きな薨の屋根を其処此処に見せた京都の町が、何十万の人それらの営みを隠して、其処に静かに秋の日を浴びて居た。敬二は其処に教科書に注がれた寿代さんの憂を知らぬ茶色の眼や、嚙々として教場へいそぐ協志社諸友の足響を見分け聞き分くることが出来た。……深い谷の向ふに画にかいた様な人家が一簇現はれた。清滝であらう、と敬二は思った。橋が架つて居る。敬二は頭上に蒼黒く聳えた愛宕の頂を見上げ、深い谷底に駈る白い川水を見下ろした。猿渡橋と書いた木橋を渡つて、直ぐ左手の『ますや』に敬二は毛布包を下ろした。▽(岩波文庫、一九八九九頁)

周知のように、「黒い眼と茶色の目」は、徳富蘆花がその青春のひとつとき同志社の学窓にあつて経験した恋のいきさつをしるしたヒューマン・ドキュメントである。右の文中に

ある「敬二」は蘆花自身であり、「寿代」は山本久栄であり、「協志社」は同志社であることは勿論である。そして、右の文章は、恋と青春につかれ傷ついた蘆花が、身と心を休めるために清滝へ向かった「愛宕の麓へ」のかきだしの部分である。清滝へ通じている白い街道に、ぼくは心つかれた二十才の青年蘆花の幻をおったものだった。

へ組んだ両手を枕にすけて、敬二は仰に寝て天井を眺めた。……浮雲の『文三』がまざぐと記憶に甦って来た。到頭来たな、と苦笑する頬のこけた文三の顔を敬二は天井に見た。▽

蘆花は「ますや」において深いおもいをつづけるが、二葉亭四迷の「浮雲」を熟読し、文三の運命を他人ごとと思えず、心のおのきをもったことは興味深い。なぜならば、主人公内海文三は明治維新の変革によって身分の特権や生活の保証を失った士族の子として生まれ、学校卒業後は下級官吏となり、やや保守的な誠実さに生きることによって、職も恋も失ってしまい、一切の行動力をもたぬ「よけいもの」になってゆかざるをえなくなっていたが、その主人公を中心にして当時

の社会を批判的にえがいた「浮雲」という作品は、日本近代文学の出発点における最もうじカルな作品であるから。

「黒い眼と茶色の目」にえがきだされた蘆花の初恋は失敗におわった。その失敗の原因は、なかば周囲の圧迫にあったけれども、なかばは彼自身の中にあつたと思われる。激しい劣等意識をもった田舎者の徳富健次郎、徳川三百年の封建制の中で庄屋を勤めた徳富家の血をひいた蘆花は儒教道徳に染まっていた。いかにキリスト信者になったとはいえ、

明治前半の歴史のなかで、一田舎青年が「自分は自分である」との近代意識をわがものにしていたとは思われない。そうした自我の未成熟の中でつき当たった恋をどうおし進めてよいのか蘆花には明確にわからなかった。しかし一方では、魅惑的な都会娘久栄を愛しているという実感は刻々蘆花に迫ってきた。尊敬する新島襄先生を含めての「久栄は良くない女です」という声が耳にひびくにもかかわらず、愛の実感を深く感じつづけながら、その恋を成り立たせてゆく主體的な条件を自分の中に発見することができなかった。こうした恐ろしい矛盾をどうすることもできず、蘆

花は絶望の旅にさまよい出てしまった。このような恋の悲劇は明治の青春に多くあつたと思われるが、それから五年、東京の明治女学校における島崎藤村と教え子佐藤輔子の場合もそうである。藤村もまた輔子を激しく恋慕しながら、やはり恋愛らしい行為を成り立たせてゆくことができなかった。藤村も蘆花も自分が運命の支配者となり、意中の恋人を世の中からたたきおとてくることができず小説「浮雲」の主人公文三と同質の悲哀と絶望のなかにおちこんでいったわけである。

近代日本の文学者・思想家たちは、封建秩序の崩壊とともに歴史の必然として、自然について、神について、人間について、社会について、歴史について、あるいはまたそれらの相互関係について、新しい認識の体系を自ら確立してゆかなければならなかった。「黒い眼と茶色の目」にかかわってきたのはほかでもない。九州水俣の郷士の子徳富健次郎は小説「浮雲」における悲哀と絶望の地点、いかえるならば、「よけいもの」としての地点から人生への出発を開始したことをみただけからである。そうして、彼は無類の誠実さ、正直さをもって、近代日本の知識人の課

題を追及していったのである。

蘆花が兄蘇峰の民友社に入社したのは明治二二年五月のことである。蘆花は生活的には兄の庇護下にあり、思想的には当時の民友社イデオロギーの支配下にあった。民友社時代に、彼は史伝・翻訳翻案・創作・自然描写・紀行文等の難多な文章を多く書いて、民友社発行の定期刊行物に発表している。だがこゝでも蘆花は孤立した自分を見出している。

△私の仕事にも実が容れなかった。皆が血眼になって興ずる政争などにも、何の興味もなかった。彼が段々現実の中に孤立する自分を見出し、流動する周囲の中に独取残さるる自分を見出した。職務の翻訳の外にも、趣味の文章を弄する機会は多く、色々の筆すさびも書いて見たが、書くものは稀薄な空疎なものばかりで、一つも物にならなかった。紅葉、露伴、美妙、などと年令は相若きながら、彼はその筆の後塵を拝しも為得なかった。彼の後から同志社を出た年若い連中が新聞社に入つて来て、ずんずん彼を追いつ越した。▽（「富士」全集第一六卷）

出版企業に積極的に参加し得ず、独創的な文学創造を意欲しつつ、猶それを果しえない

でいる若き蘆花の姿がそこにある。「民友社」の草野門平から、「兄は惻怛だが、弟は何処を風が吹くかと云う顔をしとる」と嘲笑された社員からは「猫」と陰口をきかれ、母からは「馬鹿」と罵倒された蘆花にとって、常に自らが意識していなければならなかった存在こそ、徳富一家にとって輝しい存在たる兄猪一郎であった。自己確立をとげなければならぬ。蘆花は二九才の誕生日（明治二九年一月二五日）に次のようにかいた。

嗚呼吾は久しき奴隸にてありしよ。

家兄の奴隸なりき。

情欲の奴隸なりき。

あらゆるものの吾は奴隸なりき。

今より後、吾また決して奴隸たらし。

何人にもあれ、何ものにもまれ、わが自由を齎^{あた}ぐるものあらば、即我敵也。

（全集第一六卷）

魂の奴隸からの解放。その自己確立の過程における悪戦苦闘のドキュメントとして生まれたのが、「不如帰」「自然と人生」「思出の記」「黒潮」などの作品であった。愛子夫人も夫の創作に協力をはじめた。地方名家の末娘であり、女教師出身の初心な新妻は、暗

いかげを背負った夫の異常さにおどろき悲しむばかりであったが、長篇小説「不如帰」は蘆花と愛子の合作であった。「富士」は伝えられている。

△……初めて相談さるる創作に、駒子是一方ならぬ興をもった。彼女は其大部分が学校生活である二十年の生涯の智識を挙げて夫の仕事を助けた。▽（全集第一七卷）

文学創造を媒介にして二人は一つに結びついていった。

更に蘆花の文学的自覚にふれてみよう。

「何故に余は小説を書くや」で蘆花は次のようにかいている。

△何故に余は小説を書くや。他なし、人類の一員として毫厘たりとも四海一家の大理想に此世界を近ずかしめ、日本国民の一員として進歩軍の別動隊として一頓挫せる維新の風潮に鞭^{むち}たんと欲するのみ。▽

右のような意見が出るためには、日清戦争後におけるわが国資本主義の発展とこれに伴うさまざまな社会矛盾の激化、さらに支配権力の争いによって触発された対外的危機感の普遍化等を背景にして、「社会小議論議」などがあつたことを忘れてはならない。蘆花は

進歩的であつた民友社イデオロキーの伝統をうけつぎ、明治三〇年代における社会(主義)小説の旗手となり、明治支配体制の暗黒部に向かつてするどい批判を加えた「黒潮」は、木下尚江の「火の柱」創作に決定的影響を与えたのである。文学史をみると、明治三五年ごろには、田山花袋、小栗風葉、国木田独步、島崎藤村等の作家が自然主義への道を辿っていたが、それらの人々と蘆花は資質的にちがつていたようである。しかし、明治三〇年代における大きな二つの系列、「社会(主義)小説」系と「自然主義小説」系があつたことは重要であり、まがりなりにも二つの系列が統一された作品を文学史の上に求めるならば、それは藤村の「破戒」(明治三九年)であつた。蘆花の「寄生木」(明治四二年)や「十年」(大正二年、未完)などにはその統一の可能性があつたけれども、十分に果されなかつたのは残念であつた。

和田洋一は「キリスト教的ヒューマニズムは、新島襄の同志社の中に生きていたし、蘆花はそれを同志社を通し、あるいは彼が十四五才のとき受洗した母親を通して身につけたであらうし、それは『思出の記』のような健康

な文学をうみ出す下地となつたのである。蘆花の若い時代のキリスト教的ヒューマニズムが、後年の『謀叛論』の基底になっていることもまちがいのない所だと私は考えている」(『キリスト教社会問題研究』創刊号)と述べている。幸徳事件により、日本の民主主義と社会主義のための闘争は、深刻な損害をうけた半面、日本の進歩的な人々に天皇制との対決という問題をなげかけた。蘆花は自ら積極的に、当時の首相桂太郎にあてて大逆罪の犯人を弁護し、被告の減刑を勧告しただけでなく、明治天皇宛の助命嘆願の公開状を朝日新聞に送り、さらには、第一高等学校において「謀叛論」と題する講演を行なつた。それから一連の行動は、日本近代史上の大事件に激突して燃え上がったヒューマニズムの火柱といふことができよう。そのように、蘆花は愛と信念の人であつたのである。

そのキリスト教ヒューマニズムと関連し、蘆花の宗教的要素が問題になるのだが、それは複雑な様相を呈している。『朝日ジャーナル』の「日本の思想家」で蘆花を担当した荒正人も、その宗教的要素を最も重くみたいといい、「それは、一見妄想と見えるかもしれ

ぬが、蘆花の精神の最も深い部分で鮮やかに生き続けていたのである。蘆花は思想の彼方に、信仰にもとづく平安を求めたのである。だが、生涯を通じて、完全な形ではえられなかつた。永遠の順礼者の宿命というべきかと記したが、蘆花のキリスト教については、ほくら同志社の仲間である辻橋三郎のすぐれた労作(『キリスト教社会問題研究』創刊号)がある。

ともかく、徳富蘆花は近代日本の思想や文学の歴史の上で不当に軽視されてきた傾向があつた。それは蘆花が複雑な問題をほらみすぎた人物であつたからである。今日、近代日本の思想や文学の総体的把握のためには蘆花をよけて通ることはできなくなつてきた。また、蘇峰と蘆花における協同・対立・和解の軌跡は、近代日本の精神状況をよく鍵をはらんでいる。もっというならば、本邦西南の地水保の生んだ二つの個性、蘇峰と蘆花の兄弟が、家族制度をめぐる、天皇制下の政治と思想をめぐるてぶつかりあい、泡立ちを示した問題をとくことなしに、日本近代の思想の秘密を解くことは不可能であるといつても差支えないであらう。(商高教論・国語)